

首里城公園における再現イベントの実施について

－ 朝拝御規式を中心に －

幸喜 淳（沖縄美ら島財団総合研究センター）

1. はじめに 一般財団法人沖縄美ら島財団について

当財団は、昭和50年（1975）に開催された沖縄海洋博覧会の跡地が、国営沖縄記念公園として整備された際に、公園を管理するため、財団法人海洋博覧会記念公園管理財団として昭和51年（1976）に設立した。

その後、平成4年（1992）に首里城が復元され、国営沖縄記念公園首里城地区として開園されたことに伴い、国営沖縄記念公園は、海洋博地区と首里城地区の両地区に分かれる公園となった。

首里城公園は、国営区域と県営区域からなる。国営区域は、沖縄記念公園首里城地区となり、県営区域については沖縄県営首里城公園となっている。さらに県営区域は公園区域と文化財区域に分けられ、それらすべてを、当財団が一元的に管理を行ってきた。

国営沖縄記念公園は、国土交通省管轄の国営公園として整備されているため、平成24年（2012）からは、指定管理として受託しており、県営区域についても平成18年（2006）より沖縄県の指定管理として公園の管理運営を行っている。

また平成24年からは、一般財団法人沖縄美ら島財団と名称を改め、『美らなる島を御万人（うまんちゅ）へ』を方針として掲げ、公園の管理運営に加え、沖縄の歴史文化、亜熱帯動植物の調査研究を行っている。

2. 琉球王国・首里城について

（1）概要

首里城は、現在的那覇市の小高い丘に位置し、1429年から1879年までの450年間にわたって存在した琉球王国の政治外交文化の中心として栄華を誇った王宮である。

曲線を描く城壁の中には、多くの施設が建てられているが、中でも特徴的であるのが、御嶽^{うたき}である。御嶽は、祭祀空間のことで、琉球の城の多くにみられ、首里城もその特徴を伝えている。琉球では、城をグスクと呼称しており、各地にあったグスクは、統一の過程で淘汰され、首里城はグスクの特徴を保持しながら発展を遂げた琉球王国最大の城となっていた。

城内は大きく内郭と外郭に分かれ、内郭を15世紀初期に、外郭を16世紀中期に完成させている。正殿をはじめとする城内の各施設は、東西の軸線に沿って配置されており、西側を正面としている。中国、日本と長い交流の歴史があるため、中国的・日本的な建築技術の影響を受けたと考えられる箇所がいくつも見られる。

首里城は国王の居住する王宮であると同時に、王国の行政組織である首里王府の本部であり、王国内の祭祀儀礼を運営する宗教的な組織の拠点でもあった。さらにその周辺に漆器などの工芸品を統括する奉行所があり、また芸能・音楽も盛んに行われ、文化芸術の中心でもあった。

明治12年（1879）に琉球王国は沖縄県となり、昭

和20年（1945）首里城は沖縄戦により焼失した。

（2）首里城公園の開園

戦後、首里城の城郭跡は、琉球大学のキャンパスとなっていたが、昭和59年（1984）に大学が移転したことに伴い、平成元年（1989）から正殿他御庭を取り囲む空間の復元が進められ、沖縄県の復帰20周年事業として国営沖縄記念公園首里城地区として開園した。城郭内全体の面積は、4.7haとなっている。

首里城は、幾度かの焼失と再建を繰り返しているが、戦後の復元は18世紀に建設された首里城をモデルとした。平成12年（2000）に世界遺産へ登録され、平成30年（2018）に城郭内の施設のうち復元可能と計画されたすべての施設の復元が完成した。しかし令和元年（2019）10月31日の火災により、正殿（図1）をはじめとする主要な建物が焼失した。

3. 事例① 首里城正月儀式「朝拝御規式」

（1）再現イベントが開催された背景

首里城公園が平成4年（1992）の11月3日に開園した際、記念する行事として首里城祭が実施された。

首里城祭は、その後令和元年まで実施されるが、第1回目の首里城祭は、琉球側202人、中国側100人の歴史衣裳を着用した「琉球王朝絵巻行列」（図2）が首里城周辺と沖縄県那覇市にある国際通りを会場に開催された。衣裳・小道具については、歴史や染織の研究者による監修会議を重ね厳密な時代考証を行い、大部分は中国で製作された。沖縄県を挙げての催事として執り行われた。

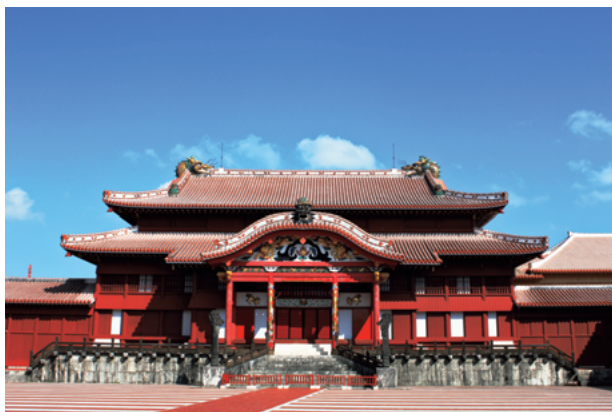


図1 首里城正殿

建物としての首里城が復元され、ハード面として整備がされたことを受け、実際の琉球王国時代にどのような生活が行われていたのか、などの展示物や催事などが不足しているという課題が浮かび上がった。それらの課題について財団として、首里城内に往時展示されていた扁額などの復元製作を行う事業や琉球王国時代の行事を再現するための調査を開始した。

平成4年に『首里城内の儀式・諸祭事に関する調査』を行い、首里城内で執り行われた儀式・祭事の中で、内容・行動が比較的判明し、道具や人員配置など絵図資料から読み取ることができる事など再現性の高い催事として正月催事を抽出し、再現に向けた調査を実施した。

（2）首里城正月儀式「朝拝御規式」について

琉球王国時代の文献は、琉球処分や沖縄戦等により多くが消失・焼失していると考えられるが、浦添市立図書館に所蔵される「琉球国王家年中行事 正月式之内」は、首里城での元日の儀礼について詳細に記述したものであることが、先の調査により判明し、それらを分析することで、イベント化することが可能となった。

複数の歴史研究者により翻刻作業が行われ、首里城での元日の時系列表を作成し、未明から始まる儀式の流れが整理された。

正月の儀式は、正殿の中、御庭、南殿などいくつもの場所で長時間に渡り執り行われることが判明した。



図2 首里城祭（琉球王朝絵巻行列）

さらに関連絵図資料の調査も行われ、当日の祭壇や建物の飾付などが再現された。使用される道具については、他の祭祀儀礼に使われる道具絵図を参考に制作が検討された。

(3) 首里城公園「新春の宴」について

首里城の儀式は、正月1日～3日に開催される「首里城公園新春の宴」内で実施されることとなった(現在では、再現儀式は1日2日のみ)。

儀式の再現をイベント化するにあたっては、先に行われた調査や衣裳道具類の製作を踏まえて、イベントを担当する係を中心に行われた。進行台本の製作には、イベント担当職員とイベント会社が作成し、監修の歴史研究者と確認を行う形で進められた。

首里城の御庭を中心として行われる「子之方御拝」、正殿の二階唐玻豊から国王が謁見し、家臣たちが御拝を行う「朝之御拝」、国王から家臣たちに泡盛が振舞われる「大通り」の3つの場面を再現し



図3 新春の宴1



図4 新春の宴2

て実施することとなった。

琉球王国時代の公式行事は、久米村と呼ばれる中国系の士族が中心となって進行を行い、中国語で執り行われた。再現イベントでも同様に中国語の発声で実施している。

実際の正月儀式には、多くの琉球役人が御庭を埋め尽くすように参加したが、再現イベントでは観覧席を設けるため、儀式を構成する主要な役職にとどめて再現された(図3、4)。

本来の儀式は、全て旧暦に実施されるが、再現イベントとして新暦の元日から3日間に実施することとなった。さらに琉球王国の公式行事には、王妃が参加することはないと考えられているが、こちらもイベント上の演出として、国王・王妃が出演することとなった。それらの史実と異なる点については、会場でのナレーションにて解説を加え実施している。

(4) 催事用道具類の復元について

先に調査された催事の内容のみならず、催事用の道具類の製作については、催事が開始された後も、琉球王国時代に正殿の一階に飾られた「三御飾道具」について、学芸員は継続して調査を行い、模造復元製作を実施している(図5)。

道具類は、国宝に指定されている「琉球国王尚家資料」(尚家資料とする)の文書の中に記されている絵図を参考に、食籠などの漆器類と金杯銀杯などの金工品、年頭にしたためられる吉書などの書跡合せて47点の内、41点の復元を目指し、現在37点の模



図5 三御飾御道具(一部)

造復元製作が完成している。模造復元に際しては、尚家資料の食籠や酒器などについて、蛍光X線をはじめとする理化学調査し、現在の琉球漆器製作では使用しない往時の道具を復元し、製作が行われた。これらの調査から漆器類の木地構造は、薄い針葉樹の木の板を巻き上げる技法を用いて製作されていることが分かったほか、現在使用されている漆器製作道具では、表現できない製作がされていることから、琉球王国時代の製作道具から再現を行った。すべての道具類が完成した際には、正月催事に合わせ、正殿一階御差床での展示をする予定となっており、首里城再建後に展示することを目標としている。

4. 事例② 百人御物参

(1) 再現イベントが実施された背景

首里城内で執り行われていた儀式は、大きく男性を中心に行われる「表の儀式」と神女たちを中心とする「内の儀式」が行われており、朝拝御規式や冊封儀式など「表の儀式」に関する再現イベントだけでは、琉球王国時代の信仰や風俗習慣を表現する事はできず、「内の儀式」を再現し、現代の沖縄に残る伝統的な祭祀や行事との関連性をイメージしやすくなるのではないかという意見や、日本の城郭と異なる城郭内に御嶽と呼ばれる祭祀空間を伴っているなど琉球の独自性を理解してもらえなどの意見が首里城の再建を検討する委員会でも述べられ、再現イベントを実施した。

(2) 首里城公園「百人御物参」について

首里城公園の整備を行っている国営沖縄記念公園事務所による平成21・22年（2009、2010）「首里城復元整備検討委員会」の中で、琉球王国時代、神女を中心に行われる祭祀儀礼の中で、『女官御双紙』『琉球国由来記』文献資料などから比較的儀礼が分かる儀式を抽出し、その中から「百人御物参」を実施する事となった。

平成25年度より具体的に催事の演出・台本製作等、実施に向けた検討を当財団にて実施し、同年から催事を行った。

実施する百人御物参は、神女が首里城および周辺の聖域（御嶽）を巡拝する祭祀行事である。御嶽では、国王の長寿と子孫繁栄、航海安全、国土の安全、五穀豊穡が祈願された。

催事は大きく4部にわかれ、御庭内に男性役人たちが神女たちを先導し、首里城内の中でも重要な首里森御嶽での祭祀を行い、城内の聖域とも言われる京の内での祭祀を行う場面を再現した（図6）。本来首里城内の火の神（ヒヌカン）や御嶽を巡拝する行事であるが、再現に当たっては、城内御嶽を巡る部分のみとし、正殿内などの建物内での祭祀については、ナレーションでの解説のみとした。また本来は、「道キューナ」と呼ばれる古謡を謡いながら祭事が行われていたと考えられるが、出演者に謡ってもらう事は困難であるため、事前に首里キューナ保存会の方々に謡ってもらったものをBGMとして流して実施した（図7）。

また、祭祀儀礼を再現するイベントとなるため、実際の祭祀儀礼ではなく、首里城内の歴史空間を公園利用者に体感してもらう事が目的であるための「再現イベント」であることを明確にして、告知を行った。

(3) 衣裳・道具類の検討

百人御参で使用される道具類については、朝拝御規式や冊封儀式と比べ、詳細な情報が見つからなかったため、朝拝御規式らの他の再現イベントにて使用する道具類を活用し実施する事とした。

衣裳については、これまで実施してきた再現イベ



図6 百人御物参1



図7 百人御物参2

ントでは使用されていない神女衣装になるため、古写真や各地に残される祭祀儀礼の調査報告や衣装などを参考にし、再現に当たっての検討を行った。

神女の衣装は、色衣装と白衣装に大きく分かれ、正殿内での儀式の際に色衣装を着用し、屋外での御嶽を巡る際には、白衣装であったと考えられ、再現イベントでは白衣装を中心に着用した。琉球王国内の祭祀儀礼を司る三平等の大あむしられ3名については、差別化を図るため、色付きの胴衣（ドゥジン）に白衣装を羽織る形態とした。

5. 運営体制

催事にあたっては、財団のイベント担当係を中心にプロジェクトチームを立ち上げ、実施運営を行っている。

催事に使われる、復元した道具類については、学芸員が資料の出し入れや取扱いを行う。イベントス

タッフへの取扱い方法のレクチャーも同時に行う。

イベントの出演者、現場スタッフ、衣裳の着付けスタッフは平成4年（1992）にこの催事が始まった当初から関わっていただいている方々を中心に構成されている。

平成8年（1996）からは、別イベントである「中秋の宴」にて毎年、国王と王妃を一般公募し、選出された国王と王妃が1年間務めることとなった。その他の出演者である三司官を中心とする高級役人役については、沖縄の芝居役者の方々に毎年出演してもらった。御庭を中心とする施設内では、開園時間内にリハーサルが実施できないため、閉園後の夜間にリハーサルを実施する上、年末から元旦にかけて拘束されることから、出演者確保には苦勞することも見受けられた。

また、イベント時に演奏される御座楽は、御座楽を演奏する保存会に参加してもらっているが、正月の出演については、演奏者の確保が難しく、演奏のクオリティの確保や後継者育成についても、取り組む必要がある。

6. 今後の課題と展望

(1) 良かった点

首里城公園として、正殿をはじめとする建物が、次々と復元されていくなか、ハードの整備だけでは、琉球王国時代の雰囲気醸し出すことは、難しく、展示品などの充実に加え、再現イベントなどのソフト事業も行うことで、日本と中国との間で成立していた琉球王国の独自性や男性を中心に執り行われる儀礼と女性を中心に執り行われる祭祀儀礼など琉球固有の信仰や風俗習慣をより身近に感じる事が出来たのではないかと考えられる。

今では、恒例行事として浸透しており、毎年一般公募で選ばれる国王と王妃やイベント出演者や同時に開催される琉球舞踊や民俗芸能などの参加者との地域連携が図られた。

(2) 課題点

平成5年（1993）より開催されてきた「新春の宴」



図8 中秋の宴



図9 冊封儀式

2017年まで実施していた中国皇帝からの琉球国王の承認儀礼である「冊封儀式」(図9) イベントも実施した。

さらに琉球王国の豊作祈願を行う催事を新たに実施するための準備を行っている。

首里城正殿その他の建物が焼失してしまい、今はすぐに同様のイベントを実施することは困難であるが、これまでの催事については、復元された道具類の活用など、さらなる検討・検証を行い、加えて新たな催事実施に向けて取り組んでいきたい。

【補註および参考文献】

- 1) 上原ゆかり 1994「首里城正月儀式「朝拝御規式」調査概報」『首里城研究』第1号 pp.18-24

だが、基本的な内容は、変更されておらず、新たな知見に基づく修正を加える必要があるほか、衣裳・道具類についてもさらに調査を進め、検討を重ねる必要がある。

また「百人御物参」は、首里城内の後之御庭と呼ばれる琉球国王が実際に生活していた区域にある御嶽でも祭祀が行われていたが、未整備であったため、供用が開始される際に、後之御庭にて行われた祭事の場面を加えた再現イベントを実施する予定であった。令和元年首里城公園の全面開園を受けて、催事の追加検討を予定していたが、火災による被害のため、実施ができなくなった。

(3) まとめ

首里城公園では、これまでに「新春の宴」「中秋の宴」(図8)「首里城祭」と大型なイベントに加え、女官たちが首里城内の御嶽を拝む祭祀儀礼「百人御物参」の再現イベントを実施した。また2004年から